

「古書データベース」作成へ向けて

松下 眞也（調査役）

早稲田大学図書館には、120余年の歴史の中で蓄積された、多くの文化財・文化遺産が存在している。

国宝に指定されている唐代の中国写本2点（礼記、玉篇）、重要文化財指定の5件（尾張国解文、東大寺薬師院文書、近江国香庄文書、崇光上皇宸筆願文、大槻玄沢関係資料）217点をはじめとして、得がたい和漢の古文書や稀覯書、貴重な学術上の資料が数多く保管されている。

これらは、おおむね慶應年間以前（1868年以前）に刊行されたもの、および、一部しかない手書きの写本・文書や原稿類などが主体となっており、「貴重書」と「古書資料」に分けられて、中央図書館4階の貴重書庫・古書資料書庫におさめられている。資料がさまざまな形態にわたるため、正確な点数は算出しにくい、約30万点にのぼるとみられる。

これらの資料の多くは四つ目綴じの線装本であるが、巻物や掛軸の形になっているものもあり、一枚ものの資料も多くある。

早稲田大学図書館では1985年のWINEシステム稼動以来20年の間に、所蔵する資料のほぼすべての書誌データ・所蔵データを入力し、資料検索がたいへん便利になったが、現在、唯一WINEの環境から検索できないものが、この和漢の古書・貴重書である。

これらの資料はおもに管理上の問題からWINEへの入力対象から外されてきた。古書資料については学内教員・大学院生に限って館外貸出もしているとはいえ、一般図書・研究図書・雑誌等と比較すると利用も少なく、目録記述の難しさもあってデータ入力のメリットがあまりないと判断されたからでもある。

しかし、ここ数年の間はかなり状況が変わった。貴重書・古書のデータをほかのいくつかの機関で電子目録に掲載しはじめ、一般に古い資料の検索がWEBで可能になってきていること、また早稲田大学図書館ホームページに設けた「WEB展覧会」

のページやIMASに収載した貴重書コレクションのデジタル画像データ等が予想外によく見られており、利用の希望も多くなってきたからである。

つとに学内外の研究者からは、「貴重書目録」もしくは「特別資料目録」のようなカタログの作成を慫慂されていた。特殊コレクションについては個々に印刷目録を刊行してきたとはいえ、現在でもなお、早稲田大学図書館の所蔵する貴重書・古書の全体から資料を探すためには、中央図書館4階の特別資料室に足を運んでカード目録を引くしか手段がない。しかし印刷目録という形でなく、WINEの中でほかの所蔵資料と同じように検索できるようにすることが望ましいのはいうまでもない。

このほど、図書館では5年ほどの計画で、貴重書・古書のデータベース作成にとりかかることとなった。資料管理課を中心としてプロジェクトを組み、具体的な作業項目・日程・入力方法などを検討し、2005年4月スタートへ向け準備作業に入っている。

この「古書データベース」（仮称）においては、通常の本誌データのほかに、画像データを同時に作成し、目録とリンクさせる計画である。古書・貴重書の画像データは、これまで、IMAS等で部分的に作成し提供してきたが、資料の保存という面、およびこれまで古書・貴重書を目にする機会のあまりなかった学生への教育効果という観点から考えても、この機会にできるだけ多くの資料をデジタル化し、公開するべきと考えている。

貴重書・古書の世界は奥が深く、目録をとるだけで「研究」と入りまじるような側面もある。古い目録カードをそのまま用いていたこれまでからすれば、再整理に等しい感もある。図書館員の経験と知恵を結集し、また学内の研究者やいろいろな外部業者等のお力もかりながら、早稲田大学図書館がこれまで蓄積してきた文化財を多くの目にふれさせ、活かし、後世につたえるため、事業をすすめてゆきたいと考えている。